

花見と地域社会 : 鹿児島県伊佐市忠元公園の事例より

著者	熊 華磊
雑誌名	地域政策科学研究
巻	10
ページ	195-211
別言語のタイトル	Cherry-blossom viewing and regional society : A case study of the Tadamoto-park in Isa City, Kagoshima Prefecture
URL	http://hdl.handle.net/10232/16670

花見と地域社会

— 鹿児島県伊佐市忠元公園の事例より —

熊 華磊

Cherry-blossom viewing and regional society

— A case study of the Tadamoto-park in Isa City, Kagoshima Prefecture —

Hualei XIONG

Abstract

This paper describes the historical process of Tadamoto park in Isa City in Kagoshima prefecture to become a popular sight for cherry-blossom viewing, and how the people around the park was involved in the preservation of the cherry trees to maintain the park. Previous studies on cherry-blossom viewing always fell into a general description and argument of cherry-blossom viewing in a wider context of Japan. Also they always focused on the cherry-blossom viewing from the viewers point of views. Thus, my study will focus on how cherry-blossom viewing is deeply related to regional society. The cherry trees of Tadamoto park were restored twice in the past. The study describes how and why the community people of Isa made such an effort to restore the cherry trees, and what did it meant to them. In conclusion, I argue that the place of cherry blossom viewing became a common base for the community people to give them a collective memory of the place. Also I will maintain that the collective memory in turn contributed as a driving force for community people to recover the cherry trees and sustain the place for cherry-blossom viewing.

キーワード：花見，桜，忠元公園，復活，場所，集合的記憶

Key Words：Cherry-blossom viewing, Cherry-blossom, Tadamoto park, Place, Collective memory.

日本語要旨

本稿の目的は、鹿児島県伊佐市忠元公園という花見の名所を事例として、地域社会における花見の定着と変遷の経緯を記述し、その中で、花見文化と地域社会とのかかわりを考察することにある。

これまで、花見についての研究は主に日本の歴史における花見の展開に関する研究であり、現代日本の花見に関する研究も、そのほとんどが花見を日本という大きな枠組みで捉え、その形式上の属性に注目したものであった。しかし、花見が日本全上に広がったのは明治中期以後のことであり、各地域は、それぞれの置かれた環境の中で花見を定着させてきた。従って、花見を特定の地域と結びつけて考察する視点が必要であることや、また、花見を考える場合、花見という行為に目を向けがちであるが、花見が行われる場所にも目を向ける必要があると言える。

伊佐市の忠元公園は、桜の名所として形成されて以来、2度にわたって桜の消失と復活を経験した。本稿は、その中の2度目の復活に焦点を当て、復活を成し遂げた背景には、地域社会の一般の人々による自発的な関わりが大きいという事実から、花見と地域社会との関係の解明を試みた。

2度目の復活に関わった「忠元桜の会」の会員たちのインタビューから、花見は場所として一つ

の「共通基盤」となり、地域社会の人々に「歴史的時間」や「娯楽的空間」の記憶を共有できる場を提供し、それによって形成された「集合的記憶」は、また地域の人々に花見の場所に対する共通の価値や意義を与え、さらにはそれが、花見の場を復活し維持する「原動力」になったことを明らかにした。

本稿は、花見を地域社会との関わりという視点から現地調査に基づいて研究するという方法の可能性を示したが、全国各地でこのような事例研究が蓄積されることによって、日本人にとって花見がいかなる意味を有しているのかという、より一般的かつ大きな問題系への接近も可能となるであろう。

1. はじめに

日本に来る前に、私は、桜が日本の代表的な花であることを知り、桜の中から日本人の国民性を探ろうとすることに興味を持ち始めた。しかし、日本に来てから、桜と日本との関係についてのイメージがだんだん変わってきた。現代日本において、桜と日本人との接触のもっとも濃厚なところは「花見」という文化であると思うようになった。桜と日本との関係を解明するために、花見文化を理解しなければいけないというのが、研究テーマを「花見」にした理由である。

花見についての研究で一番多いのは、山田孝雄の『櫻史』[山田 1941]や有岡利幸の『桜』・『桜』[有岡 2007]などに代表されるような、日本の歴史の中における花見の展開に関する研究である。これらの歴史的研究から、花見は古くから日本に存在してきた慣習であるが、時代の流れとともに、場所や参加者、行われる地域など、花見の諸要素は数多くの変化を遂げたこと¹、そして、現在のように、花見が日本の全国的な行事になったのは、明治中期以降のことである²ということが明らかになった。

このような豊富な花見の歴史的研究に対して、各地域の花見の事例的あるいは実証的研究はほとんど皆無に等しく、しいてあげるとすれば、白幡洋三郎の『花見と桜 日本的なるもの再考』[白幡 2000]と陳珏勲の「「花見」の人類学的研究 宮城県仙台市におけるフィールドワークに基づいて」[陳 2005]があるのみである。

白幡は、日本文化を考察するには、従来よく見られる「桜論」的な研究ではなく、「花見論」的な研究の重要性を主張し[白幡 2000:22]、また、外国との比較の中で、外国には無い日本の特有の花見の特徴を表わす要素として、「群桜」「飲食」「群集」の3つを提示した[ibid.:17]。

陳は、「宮城県仙台市において行った参与観察にもとづいて、日本の花見は実際にどのように行われ、また、どのような目的および機能があるのかについて」[陳 2005:21]考察した。東北大学における4つの団体のそれぞれの花見を参与観察することによって、陳は「花見には、それを行う目的や集団の性質に応じて、様々な形態がみられる」[ibid.:30]と結論付けた。

白幡と陳の研究は、いずれも花見を日本という大きな枠組みでの一つの慣習として捉え、そ

1 例えば、花見の参加者は最初の公家から武家に広がり、江戸時代に庶民階層に広がり、さらに明治以降国民まで広がった。

2 明言した文献はないが、桜は明治中期以降、日清・日露戦争の記念植樹ブームとともに日本全国に広がったと記述した文献が多く、花見もその時期以降に全国に広がったと思われる。

の形式上の属性に注目したが、それだけでは現在、日本各地で盛んに行なわれている花見の実態を踏まえて、より一般化して説明するには不十分である。日本の歴史の中における花見の展開についての研究からわかるように、一見して日本のどこにでも同じように見える花見であるが、現実には、異なる時代や地域のコンテキストの中で、様々な変化を遂げてきたのだ。つまり、花見を特定の時代と地域の中に位置づけてとらえる必要がある。

また、上記した両研究をはじめ、現代日本の花見についての研究のほとんどは、花見という行為に目を向けがちである。しかし、花見には、その行為自体以外にもいろいろな要素が含まれている。本稿では、花見が行われる場所あるいは空間に目を向けて考察していきたい。このような場所の創造や維持は、行政や業者によるものだけではなく、地域住民によるものもかなり大きい。その際、地域の人々が自発的に花見の場所の創造や維持に取り組む原動力は何かという疑問が出てくる。本稿では、花見の場所と地域との相互的影響を M. アルヴァックスのいう「集合的記憶」³ を持って分析して、「原動力」の所在、または、花見と地域社会との関係を明らかにする。

従って、本稿は鹿児島県伊佐市における忠元公園という花見の名所に焦点を当て、それができてから現在までの歴史的経緯を述べ（3章）、その中で、忠元公園が経験した2回目の桜の復活に注目し、その復活に貢献した地域の人々の行動および言説を記述する（4章）。そして、「集合的記憶」という概念を使って、地域の人々と花見の場所との関わりという側面から花見と地域社会との関係について考察する（5章）。ただし、忠元公園での花見の様子に関しては、著者の修士論文「地域と花見に関する文化人類学的考察」において詳述しており、なおかつ本稿の焦点からややずれるため、詳しくは触れない。

なお、本稿で扱う資料は、主に2010年から2012年にかけて、伊佐市でおこなった、計8回の断続的なフィールドワークによって得られた文献資料及び調査資料である。その中で、忠元公園の2回目の復活に関する聞き取り調査は2012年6月13日から6月16日にかけて実施した。また、関係者の実名に当たっては、予め了承を得たうえで本稿にあげることにした。

2. 調査地の概要

伊佐市は、鹿児島県・宮崎県・熊本県の県境に位置する、県本土最北の市である。また、周囲を九州山脈に囲まれた盆地を形成し、平地の中央部を川内川とその支流が流れ、これらの水系を中心として広大な水田がひらけている。

伊佐市の面積は392平方キロメートル（東西23km、南北27km）であり、県内の市の平均値の約



図1：伊佐市位置図(伊佐市ホームページ：2012年12月6日参照)

³ 本稿で M. アルヴァックスの「集合的記憶」という概念に注目するのは、その分析概念として有用性にあり、従って、概念そのものについての批判的検討については意図しない。

1.3倍の面積となる⁴。

歴史的には、現在の伊佐市は、かつて大口地方と菱刈地方に別れていた。大口地方は1569年（永禄12年）に新納忠元が地頭になるまで牛山院や牛屎院と呼ばれていたが、その後は大口と呼ばれ明治維新まで島津の直轄地であった。1887年（明治20年）に伊佐郡の郡役所が大口に設置され、1889年（明治22年）に市町村制実施により大口村・山野村・羽月村となった。その後、1954年（昭和29年）に伊佐郡の内の4町村が合併して「大口市」となった。

菱刈地方は明治以前、太良院と呼ばれ、1889年（明治22年）の市町村制実施により菱刈村と太良村ができた。さらに1954年（昭和29年）に菱刈町と本城村が合併し、「菱刈町」となった。そして、2008年（平成20年）11月1日、旧大口市と旧菱刈町が合併して、現在の伊佐市となったのである。

平成22年の国勢調査によると、伊佐市の人口は29,311人、世帯数は12,795世帯である。平成元年以来毎年、人口が減少傾向にある。また、全国で高齢化率の高い鹿児島県においても、伊佐市は高い方であり、しかも、毎年増加していく。つまり、伊佐市はいわゆる高齢化・過疎化が進んでいる地方都市の典型である。

明治以前、伊佐地方の産業はほとんど農業であったが、明治以降、近代化、工業化が進む中、伊佐では、林業も鉱業も発展してきた。戦後、農作業の機械化や人口の流出などにより、農家が著しく減少した⁵。

伊佐市の観光については、曾木の滝公園と忠元公園がその代表的な観光地として上げられている。伊佐市は鹿児島県内で多く見られる温泉観光地ではなく、また、JRが直接繋がっていないため、伊佐市の観光形態は、収益の少ない「日帰り方」とも言える。このような状況の中で、忠元公園は伊佐市の市民公園であるとともに、重要な観光資源の一つでもある。



図2：忠元公園の位置図（伊佐市ホームページに掲載された伊佐市全図に基づき、著者作成）

4 伊佐市概要。 <http://www.city.isa.kagoshima.jp/about/gaiyou.html>, (アクセス:2012年12月6日)

5 大口市郷土誌編纂委員会『大口市郷土誌 下巻』鹿児島県大口市長大縦利夫, 1978, p274.
平成22年度版『統計いさ』, 2011, p22-23.

3. 忠元桜⁶の概要

3.1 忠元桜の年表

忠元桜に関する歴史や出来事について、年表の形にまとめると下記ようになる。

[表 1] 忠元桜の年表

時 間	出 来 事
忠元桜ができた以前	
1611 (慶長15年)	新納忠元が没後、伊佐市大口原田にある忠元廟に埋葬された。
1844 (天保15年)	忠元神社が落成した。
1 代目忠元桜	
1909 (明治42年)	忠元公没後300年祭の記念事業として、明治41年から桜の植樹が行われた。
1937 (昭和12年) まで	忠元桜は県外でも知られている桜の名所として、当時の花見様子は非常ににぎやかだった。
戦時中	花を見る暇もなかったので、忠元桜の花見は実質なくなった。
1945 (昭和20年)	桜の木が全部伐られて、木炭にしてしまい、空地が開墾され、さつまいもなどの食糧用地に使った。
2 代目忠元桜	
敗戦後	地元の青年団と大口青年団は忠元神社近くに桜を植えた。お金がないから、少しだけ植えた。
1954 (昭和29年)	大口町・山野町・羽月村・西太良村の合併による大口市発足した。
1955 (昭和30年)	市役所主導で桜を植えようとした。桜の競争入札が行われ、鹿児島県や福岡県など多数業者が参加したが、唯一千本以上の苗木を持つ山口憲親が落札し、千本桜を植えた。
1956 (昭和31年)	忠元公園復活促進期成同盟会が結成、忠元桜が復活した。
1962 (昭和37年)	忠元公園が大口都市公園に認定された。
1990 (平成 2 年)	忠元桜が「財団法人日本さくらの会」により「日本桜の名所百選」に選定され、鹿児島県内唯一選定された場所となった。
3 代目忠元桜	
1998 (平成10年)	台風による倒木や老木化のため、桜の本数が減りつつある。忠元桜を蘇るため、忠元桜の会が発足した。
2008 (平成20年)	大口市と菱刈町の合併による伊佐市発足した。
2010 (平成22年)	忠元公没後400年祭が行われた。

上記の忠元桜の年表に沿って、以下で忠元桜の概要を詳しくみていこう。

⁶ 忠元公園は公園としてできた以前から桜があり、花見の名所であったため、ここでは地元の人々の呼称を借りて、この場所を「忠元桜」と呼ぶ。

3.2 初代忠元桜

忠元とは、戦国時代薩摩藩の武将、新納忠元を指している。島津の武将として生涯主君に忠義を尽くし、多くの戦功をあげた新納忠元は、合わせて35年間⁷近くを地頭として大口に在した。新納忠元没後、1844年（天保15年）に、忠元神社が落成した。さらに、1909年（明治42年）の忠元公没後300年祭の記念事業として、明治41年から同43年まで桜の植樹が行われた。

当時の桜の植樹に関する記述⁸によれば、緒方隆成氏、有村彦助氏、市来政香氏ら地元出身者が主導者となり、忠元公没後300年祭の記念事業の一環としての参道改修で、忠元神社から諏訪馬場まで桜が植えられた。

桜の植樹の時代背景を考えてみると、1909年（明治42年）は日清戦争（1894～1895）・日露戦争（1904～1905）という日本を近代的国民国家に導いた二つの重要な戦争が終わった4年後であった。当時はまさしく全国的に桜植樹ブームともいえる時代であろう。日本を近代国民国家に作り上げようとする政府は、江戸時代まで各藩に属した人々を、日本国民という一つの概念でまとめるための装置を求めていた。日本「固有」の、「伝統」的な美意識や「武士道精神」と結び付けられる桜は、その中の一つ主要な装置となった [大貫 2003]。学校教育やマスコミの影響により、また、近代公園やソメイヨシノの導入によって、桜の人気は日本全土に広まり、桜の植樹もさまざまなイベントの記念事業として行われるようになった [佐藤 2005]。生涯主君に忠義を尽くした新納忠元を、「武士道」の美德を持つ人物の象徴として顕彰する彼の記念祭には、桜の植樹がもっともふさわしかったのであろう。

忠元公没後300年祭に桜がたくさん植樹されたが、桜があるからといって花見の名所になるわけではない。当時花見が盛んになった理由の一つとして考えられるのは、近代化していく日本に鉱山ブームが起きて、しかも現在の伊佐市大口には牛尾鉱山、大口鉱山、布計鉱山など、金鉱山がいくつもあったという事実である。

明治40年代からの鉱山ブームで、発電所や青化精錬所ができて、鉱山で働くために、県内外から移住してきた人は実に二千数百人もいた⁹。鉱石などの運送のための鉄道は、忠元神社のある台地のすぐ下を通ったので、日々重労働を続けた鉱夫たちにとって、桜の季節になると、昼間の仕事を終え、鉄道を利用して忠元神社に行き、夜桜の花見を楽しみながらお酒を飲むのは最高の娯楽だったであろう。地元の農民たちも花見をしたに違いないが、大勢の鉱夫たちが桜の下に一気に集まって喧騒したことこそが、賑やかな忠元桜花見の原点だと思われる。

しかし、賑やかな花見は昭和12、13年まで続いたが、その後戦時に突入し、花を見る余裕がなくなり、さらに、1945年（昭和20年）近く、日本の敗戦が間近になると、荒廃した1代目の桜が全部伐られてしまった。当時の自動車がガソリンではなく、木炭を燃料としたため、伐られた桜は全部木炭にされ、残った空き地はさつまいもなどの畑になってしまったのだ。

7 「忠元公は鳥神尾合戦後、大口地頭（大口城主）として永禄十二年（一五六九）九月、四十四才で着任した。その後、文禄三年（一五九四）三月、上洛京都参勤在京のまま清色（入来）地頭、帰国後清色から飯野地頭へ、そして、再度大口地頭へと通算六年間大口を離れたものの約三十五年間大口に在した」。伊佐市郷土史誌編さん委員会『新納武蔵守忠元公小伝』伊佐市、2010、p50。

8 例えば、有川国千賀『菱刈史・北伊佐史』名著出版、1973、p128；大口市郷土誌編さん委員会『大口郷土誌 下巻』鹿児島県大口市、1978、p344；現在伊佐市大岳寺境内にある「緒方隆成之碑」など。

9 大口市郷土誌編さん委員会『大口郷土誌 下巻』鹿児島県大口市、1978、p328。

3.3 2代目忠元桜

戦後まもなく、地元大口原田の青年団や大口青年団が中心となって忠元神社の近くに桜を植え始めたが、食事さえ不安定な当時の社会状況の中で、桜を植えるお金は当然なく、少ない数の桜しか植えられなかった。その後、1954年（昭和29年）に、大口町・山野町・羽月村・西太良村の合併により、大口市が誕生すると、1955年（昭和30年）、市役所の主導のもとに、昔の忠元公園を復活しようとする活動が始まった。桜の植樹のための競争入札が行われ、福岡や鹿児島島の造園業者が多数参加した。その中に、地元出身の山口憲親がいた。入札の結果は、地元の間でもあり、業者の中で唯一千本以上の苗木を持っていた山口が落札した。

この山口憲親の植樹には、まだ後日談がある。桜の植樹は、市役所が中心となってはいたが、やはり当時の行政側はそこまで資金を持っていなかったため、寄付金を集めて山口に支払うと約束した。山口は昔の忠元公園を参照し、忠元神社から諏訪馬場までの参道や原田集落までの参道に桜を植樹し、さらに曾木の滝公園にも桜を植えた。しかし、植樹は終わったが、寄付金がなかなか集まらないため、山口への支払いはできなくなった。山口によると、1956年（昭和31年）に、市役所観光課の職員が山口の家に来て、土下座して謝罪したという。山口はもちろん立腹したが、その時、山口の父親から「地元のことだから仕方がない」と言われて、支払いの要求を諦めたという。その後の3年の間、毎年桜の季節になると、市役所観光課の人たちは必ず山口を花見に招待したが、担当役人は3年ごとに任期を終え、ほかの部署に移動するため、それ以後招待されたことがなく、山口がただで千本桜を植えたことは、次第に忘れられてしまった。

また、忠元桜の一回目の復活に関わったのは、山口以外にもたくさんの地元の人々がいた。1956年（昭和31年）10月17日に、忠元公園復活促進期成同盟会が生まれ、昔日の「忠元公園」、「桜の忠元」を再現する為に、公園内に桜やつつじ、楓などを植栽し、将来、「スポーツ・センター」として公園を育てようと企画していた¹⁰。さらに、桜が植えられたとはいえ、すぐ咲くわけではなく、また、毎年綺麗に咲くよう手入れをしなければならなかった。現在は業者を頼んでやっているが、当時は忠元神社の近くにある原田集落と国ノ十集落の住民たちによって手入れがなされたという。原田集落には忠元神社を管理する係が決められている。主に神社境内の清掃であったが、山口が桜を植えていた頃、毎日この両集落から二人が、山口の作業の手伝いに来てくれたそうで、仕事を終えた後は、彼らは必ず山口を連れて飲みに行ったという。また、桜が植えられた年の冬に、両集落の人たちが桜の回りの土を掘って肥料を施した。彼らの懸命な努力により、1956年（昭和31年）からすでに桜は開花し、1957年（昭和32年）に「桜の忠元」は正式に復活したのであった。

3.4 3代目忠元桜

2代目忠元桜は長く咲き続けて、花見も盛んだった。昭和30年代から昭和50年代前半までは景気もよかった。1970年（昭和45年）の国勢調査によると、大口市の人口は42,905人とピークを迎えたが、その後徐々に減少し、2010年（平成22年）の自治会別住民登録人口によると、大口地区の人口は10,767人にまで減少してしまった¹¹。当時好景気だった理由は、大口にはたく

10 大口市教育委員会『大口市三十年誌』1988, p54.

11 平成22年度版『統計いさ』, 2011, p7.

さんの鉱山や材木場があり、大口で働く人が多かったからだ。地元の人の話によると、大口には、熊本県水俣市の水俣駅と鹿児島県始良郡湧水町の栗野駅を結んでいた山野線と、川内市の川内駅から大口市の薩摩大口駅までを結んでいた宮之城線という二つの鉄道路線が通っていた。主要産業は農業であるため、毎日貨物列車による肥料の運送で賑やかだったという。また、薩摩大口駅のすぐ近くに木材置き場があり、材木業や鉱業も鉄道を頻繁に利用し、当時大口市は北薩、さらに熊本南部に至る交通の要衝であった。しかし、高度経済成長期の到来により、大量の労働力は中央の都市部に流出し、また、自家用車の普及により、列車を使う人がどんどん減少したため、遂に、1987年（昭和62年）に宮之城線が廃線となり、翌年には山野線も廃線に至った。今まで列車で花見に来た人たちが来られなくなった。さらに、1992年（平成4年）、忠元公園の桜並木が、桜の伝染病「天狗巣病」に侵されていることがわかり、3月12日、九州電力大口営業所が提供した高所作業車を使って、病気に感染した枝部分を伐採する奉仕作業を実施したが、同年8月の台風10号によって、130本もの桜の木が、倒れたり枝が折れるなどの大きな被害を受けた。高台にある忠元公園は風当たりが強く、強風で根元から完全に倒れ、起しても根付かないと思われる桜が約50本、折れた枝をきれいに切って、防腐処理をしなければならぬ桜が約80本あり、桜並木も歯が抜けたような状態となった¹²。

このような事態を改善するため、1998年（平成10年）に、故中村憲磁個人の発案により、「忠元桜の会」の設立が、南日本新聞の「ひろば」の欄で提案され、市民の賛同を得て発足した。本会は事務局を市役所地域振興課に置き、会員たちの寄付金を使って、忠元公園での桜の植樹や保存などの事業を行った。その後、桜が徐々に植樹され、2007年（平成19年）に忠元公園の桜は完全復活し、「忠元桜の会」もその後休会となった。

以上で見たように、忠元桜は2回の復活を経て、今日鹿児島県内唯一「日本桜の名所百選」に選ばれた花見の名所になった。ここで注目したいのは、この2回の復活が、行政の働きのみによるものではなく、むしろ地元の人々が自発的に取り組んでいるという事実である。鹿児島県内では、花見の名所は忠元公園以外にも何か所もあり、自家用車の普及もどんどん進む中で、住んでいる地域に桜がないと花見ができないから、という理由だけでは、地元の人々の自発的



写真1：忠元桜 写真の中で明らかに太い木は2代目忠元桜で、その他は3代目である（2012年3月31日筆者撮影）。

12 大口市郷土史誌編纂委員会『大口市制五十五年誌』大口市、2008、p307-309.

な取り組みを説明できない。地元の人々を動かした原動力はなんなのかを探ることこそ、花見と地域社会との関係を解明する鍵になるのではないかと思い、以下、本稿では2回目の復活を中心に考察していきたい。

4. 忠元桜の2回目の復活

4.1 忠元桜の会

平成に入って、2代目忠元桜はかなり老木化が進み、それに台風や病虫害などの被害が加わり、忠元公園では最盛期の面影もなくなったといわれるほど桜の状態が悪化してしまった。このような事態を改善し、今日のようにぎやかな忠元公園の復活にもっとも貢献したのは、1998年（平成10年）に形成された「忠元桜の会」である。

伊佐市郷土史誌編纂委員会会長を勤めている東哲郎の記憶によれば、当時忠元公園の荒廃ぶりがひどく、忠元桜を復活させようとする声が市民の中に数多く存在した。そして、1998年（平成10年）に、伊佐市民である中村憲磁が南日本新聞の「ひろば」の欄に投稿し、広く協力を呼びかけたことをきっかけに、1998年（平成10年）11月27日に「忠元桜の会」が形成された。以下で、最初に、2005年（平成17年）の「忠元桜の会 会則」に従って、「忠元桜の会」の会則や概要について見ていこう。

「忠元桜の会」は、「忠元公園の桜を蘇らせ桜並木を保存することを目的とし、桜の植栽を行い、会員相互の情報交換を図るものとする」。そして、当会は事務局を大口市地域振興課内に置き、上記の目的を達成するために、「桜の植栽に関する事業 本会の案内に関する啓蒙活動 その他、本会の目的達成に必要な事項 桜の木の管理に関する市への提言」という四つの項目を中心に活動を行う。会員の資格に関して、「オーナー代金一口50,000円を収めた個人（複数可）・法人・各種団体」を会員とする。ただし、脱会した会員のオーナー代金は返却しない。

「忠元桜の会」の構成について、会長、副会長と監事それぞれ1名の役員がいる。会長は当会の代表として、会務を統括する。副会長は会長を補佐して会務を総括し、会長に事故のある場合は、その職務を代行する。そして、監事は、会計及び業務の状況を監査する。また、当会の会議は、総会及び役員会などがあるが、総会は、年に1回行われ、会員の半分以上の出席がなければ開会することができない。総会では、「会則の変更に関すること 役員を選出に関すること 収支予算及び決算に関すること 本会の解散に関すること」という四つの項目が議決される。

「忠元桜の会」の実際の働きについては、「平成11年度 忠元公園桜植栽及び移植工事について」という資料に基づき作成した下記の表をもとに見ていこう。

表2からわかるように、「忠元桜の会」ができた翌年の1999年（平成11年）に、相当な予算で桜の植栽や移植が行われ、計94本の桜が植えられている。また、病虫害の被害を受けた老木などを除去する作業も同時に行われた。このように、毎年少しずつの努力の積み重ねで、忠元桜は見事に蘇生したのであった。

では、「忠元桜の会」の会員にどんな人がいるのだろうか。2001年（平成13年）の「忠元桜

[表 2] 平成11年度 忠元公園桜植栽及び移植工事について

工事名	忠元公園桜植栽工事	忠元公園桜移植工事
費 目	商工費 / 観光費 / 工事請負費 (6・1・3・15)	商工費 / 観光費 / 工事請負費 (6・1・3・15)
予 算 額	3,000,000	1,680,000
契約方法	随意契約 (地方自治法施行令第167条の2第1項第2号及び第5号の規定による)	随意契約 (地方自治法施行令第167条の2第1項第2号及び第5号の規定による)
請負業者	坂元緑造園 (坂元眞孝) 大口市下殿1056-1	坂元緑造園 (坂元眞孝) 大口市下殿1056-1
請負金額	2,968,875円	1,669,500円
契 約 日	平成12年1月21日	平成12年1月17日
履行期限	平成12年3月17日	平成12年3月17日
完 成 日	平成12年3月17日	平成12年3月17日
植栽本数	69本	25本

の会会員名簿」によると、会長1人、副会長1人、監事1人を含めて、会員総数は36人(団体)であり、そのうち、「大口酒造協業組合」を始めとする法人が9つ、「大口市課長会」を始めとする行政団体が2つ、「関東薩摩大口会」を始めとする個人団体が3つあり、残り22はすべて個人名義である。

このように多くの人たち(法人・団体も含めて)が「忠元桜の会」に参加した理由は何か。また、参加後にどんな活動を行ったのか。さらに、忠元桜・忠元公園をどのように見ているのか。以上のようなことについて考察するために、2012年6月13日から6月16日にかけて伊佐市で行なった聞き取り調査をもとに、以下で5人のインフォーマントの話を提示してみよう。

4.2 忠元桜の会の会員のインタビュー

A) 東哲郎(男性;70代)

東は大口里の住人で、大口消防局に勤め、定年後現在、伊佐市郷土史誌編纂委員会会長を勤めている。

「忠元桜の会」に参加するきっかけとして、「中村憲磁さんは南日本新聞の世論欄に投稿して、それで知った。当時は一口10万円だったが、1、2年経ってから5万円に下がり、それで参加した」という。

寄付した理由について、「(忠元桜は)伊佐のほこりだ。忠元公は大口の先人、誇りとして思われているから。伊佐の名物である忠元桜祭りを復活させんといかん」と答えた。

「忠元桜の会」の活動について、「会自体は今ほとんど活動していない。最初の頃は総会もあったが、今はない」という。また、東の持っている資料によると、2007年(平成19年)まで総会があり、平成19年度の総会資料では、彼は副会長になっているが、彼自身はこれについて、知らなかったという。

忠元公園での経験や思い出について、まず「戦前の花見は非常に盛んだった。母の話によると、昔、花見の頃、水汲みのアルバイトもあった。それくらい人が多かっただろう」という。また、自分の経験として、「昔は集落の総会で、よく忠元公園に行った。その頃、4月あたりなので、霜がよく降っていた。同じ集落の中にたばこを作っている農家が数多くいた。たばこは霜に弱いため、降ってきたら、酔っ払いながらも霜を防ぐ作業を手伝いに行った。グループ十何人で、それぞれのたばこ農家に分かれて手伝いに行った」という。

忠元公園での花見について、「最近はあんまり集落の総会としての花見に行かなかった。行政自体は力を入れておらず、花見は集落の花見から個人団体の花見に変化していく。しかし、不景気な世の中、昔のようにゆっくりとお酒を飲みながら、歌ったり、踊ったりする余裕がなくなってきた。やはり、少しでもその余裕を作り出したい」と語る。

B) 今村隆 (男性 ; 67歳)

今村は1945年(昭和20年)に生まれ、「レーディス・ファッションいまむら」を経営し、現在大口仲町に住んでいる。

「忠元桜の会」に参加するきっかけは「観光協会の呼びかけ」である。また、「忠元桜の会」の活動については、「寄付した程度しか覚えていない。最初の頃総会があった」。「レーディス・ファッションいまむら」は「観光協会のメンバーとして、提灯の寄付を毎年しているけど、詳しい事情(そのお金でどのように活動しているのかなど)は知らない」という。

寄付した理由については、「(忠元公園は)地域から切り離せない大口の一つの売り物なので、みんなで少しずつ負担すべきだと思って、寄付した」。

忠元公園での経験や思い出について、「身近の公園なので、ちょこちょこ行っているけど、桜祭りには特に(行っていない)。昔は夜も(忠元公園に)上がって飲みに行った。ひたすら飲むだけで、特別な思い出は(なかった。)ただ、昔は一つの楽しみとして、特設の飲み屋の出店もあったが、時代的なものだから、今はなくなったのはしょうがない。今の(忠元公園)の真ん中は芝生だから、昔と比べるとずっときれい」と語る。

C) 平城ミエ (女性 ; 85歳)

平城はかつて看護婦長を勤め、老人ホームことぶき園にも勤めた経験があった。現在ことぶき園のそばにあるケアハウス・グリーンハイツ周山に在住している。「ことぶき園 桜を守る会」という名義で「忠元桜の会」に参加した。

「ことぶき園 桜を守る会」について、「以前勤めた介護施設であることぶき園の職員たちに、結婚する時とか、子供が出産する時とか、退職する時とか、うれしいことがあった時に桜を一本でも植えようと呼びかけた。また、そこにいた患者さんたちにも寄付の呼びかけをした。それで集まったお金を寄付した」。その際、「ことぶき園 桜を守る会」という名義を使った。それに、個人としても100万円の寄付をしたという。

また、「忠元桜の会」に参加したきっかけは、「当時、木がだめになって枯れてしまうのが多かった。昔有名な忠元公園の面影がなくなったが、役所は実働しない」からだという。

平城は「忠元桜の会」の活動や、桜を維持、管理する活動に実際にに関わり、また、意見もた

くさん持っている。まず、寄付したお金の使い方について、「当時、桜の寄付について、市は1本8万円と説明した。それがおかしいと思い、熊本で桜の苗木を取り扱っている業者のところに実際見に行ったら、桜は1本8千円だった。それを持って市に問い合わせしてみると、市の考え方では、古い木を取りだし、苗木を植えこむ作業を全部合わせると8万円くらいかかると答えた。しかし、それらの作業は市が負担すべきであり、市民は桜だけを寄付するのではないのかと思った」と語る。また、寄付した後の形について、「市民個人の寄付で、札をつけて、何々の時に植えた。そうすると、自分も気になり桜を見に行くし、見に行くと、成長がよくなかったら、手入れしようとする考えも出てくる。また、子供たちを連れて行って、その時々々のことがあったよと、思い出を継承させることもできる」と市役所に提案したが、受け入れられなかった。さらに、「介護施設に百歳を迎えたおばあちゃんがいた。国からも、市からもお祝いとして、10万円の祝い金がきた。おばあちゃんは10万円をもらったが何もできないと悩んだ時、桜の寄付を勧めた。おばあちゃんも喜んで同意した。このことについて市の観光課に話したら、植えるところはないとの返事がきた。今年植えた桜に札をつけて、その寄付金で来年また桜を植えればいいのかと提言したけど、ついに植えさせてもらえなかった」ということもあった。

忠元公園での経験や思い出について、「小さい頃、忠元公園や桜の思い出がいっぱいある。当時、いい食べ物はないけど、花見の時だけごちそうがでる。花見の時に食堂が出たけど、一般の庶民は自分のうちの重箱を持ってきた。当時、たまごは、普段は食べられないけれど、花見の時だけは卵焼きなどを食べた」と語る。さらに、「若い頃、花見相撲も行われた。いろんなところから力自慢な青年が集まってきた。そして、若い女の子もいっぱい集まった。忠元公園は一つの集団お見合いの場でもあり、出会いの場でもあった」という。

D) 平山政男 (男性 ; 92歳)

平山は元市議員、忠元神社の役員を20年間勤めた。現在伊佐市原田集落に住んでいる。自分の名義ではなく、娘4人のそれぞれの名義で「忠元桜の会」に寄付し、参加した。

「忠元桜の会」に参加したきっかけについて、「お金は持ってないけど、農協で勤めたこともあって、退職時に50万円近くの退職金をもらった。当時、忠元桜の会の会費は9万円だったので、娘4人の名義で、36万を寄付した」という。なぜ自分の名義ではなく、娘4人の名義で寄付したのかについて、「自分は先が短いから、子供たちのために4人分を支払った」と話す。ただ、「桜の木を植えんと、地元のためにはならん」というのが、寄付の原点であると語った。

忠元公園での経験や思い出について、「小さい頃はよくお小遣いを持って上がって行った。楽しみにしていた。夜は提灯が下がり、人が多かった。家から音が聞こえるほどだった。」「昔(戦前)は三角の向こう側に桜はなかった。道路側だけだった。三角の中は畑であった。出店は神社の方から現在の滑り台のあるところまで並んだ。サーカスは毎年来た。両親と一緒に中に入ったことがある。サーカス(のテント)は現在神社側のトイレのところに建った。大きかった。」「終戦後、昭和21年頃に帰って、桜(がなくなったこと)を見てびっくりした。しかし、当たり前だと思っている。戦争に負けたし。だけど、役員になってから忠元神社や公園のことで一生懸命やった。その後、集落の仲間や役員たちともよく飲みに行った」と、小さい頃から

の思い出をたくさん語ってくれた。

E) 神園祐治 (男性 ; 60代)

神園は平成13年度に忠元桜の会の監事を勤めた。現在、「かみぞの商店」を経営し、大口上町に住んでいる。

「忠元桜の会」に参加したきっかけは、「自然耳に入ったが、忠元の桜はある程度植え替えないといけない」と思い、寄付をした。また、監事になったことについては、「よくわからない」という。

忠元公園での経験や思い出について、「小さい頃よく見に行った気がする。高校に入ってから、ラグビーをやっている、合宿の時に、桜は咲いていないけど、神社の階段のところからスクワット・ジャンプして上って、走って向こうから降りた思い出がある」と話す。また、大人になって、「かみぞの商店」を経営し、「忠元桜がもう、戦前はすごかった。地元の人が花見をするため、多くの商売が行われていた。大口の商売人にとっては、一つの商売の場だと聞かされた」という。そして「われわれの時代でも、忠元桜を残していきたい。もっと広げて、もっと四季に通じる公園にしたらもっといいな。やっぱり忠元といたら桜。いわれたものをなくしちゃいけない」と、その意義を語る。

忠元公園で花見する場面について、「花見の場は「昔」を語ることの場所じゃないかな。見渡せると人が昔のことを語りたくなる」という。

5. 花見と地域社会

以上で提示した5人のインフォーマントの話を中心に、花見と地域との関係を考察していきたいと思う。

5人のインフォーマントの話に示されるように、彼らが「忠元桜の会」に参加したきっかけも、理由もそれぞれ違うし、忠元公園での経験や思い出も違う。では、「復活させんといかん」という共通の意識、そして「復活」という共通の行動へと彼らを引き寄せたのはなんだろうか。

インフォーマントたちの忠元公園での経験や思い出は、一見して異なっているが、その中で共通しているのは、地元の人でしか語れない経験や記憶が数多く含まれていることである。

例えば、東の思い出は、伊佐の気候や伊佐の農業を知らない人には語れない。また、平城が語るような、忠元公園を、花見の場としてだけではなく、集団お見合いや出会いの場とする捉え方も、地元民であればこそ生じるものであろう。今村は「特別な思い出はなかった」と言ったが、昔は公園の真ん中に特設の飲み屋の出店が並んで楽しかった、というように、時代の流れの中に現われた変化の中で、忠元公園を捉えている。平山の、「小さい頃はお小遣いを持って上がって行った」とか、「昔は三角の向こう側に桜はなかった」なども、忠元公園は高台の上であり、桜の木に囲まれた形は三角である(図3)ということを知った上での、地元の人ならではの表現である。最後に、神園は地元高校のラグビー部出身であり、地元で商売をしている家の出身であったが、そのような出自であったからこそ語ることのできる忠元公園での経験や、教えられた忠元公園の意義を語っていた。

このように、インフォーマントの潜在意識の中で、忠元公園は単なる花見の場所だけではない。彼らの記憶の中では忠元公園は花見以外にもたくさんのイメージを持っている。それは個人の小さい頃の生活場面を表したり、集落の共同労働の場面を表したり、地域社会全体の歴史や時代変遷とつながっている。

アルヴァックスは『集合的記憶』の中で、「場所は集団の記憶の刻印を受けており、あらゆる集団のあらゆる歩みは空間の用語によって表現することができるし、集団の占有する場所はあらゆる用語の集合にほかならない。この場所の逐一の様相、逐一の細部はそれ自体、集団の成員にしか理解できない意味を持っているのである」[アルヴァックス 1989 [1950]:167] と述べている。「忠元桜の会」のインフォーマントたちの語った地元ならではの経験や記憶はこれに当てはまるだろう。

また、浜日出夫がアルヴァックスの集合的記憶論を引用し、記憶を「記憶とは過去の出来事の単なる貯蔵としてではなく、現在の状況に合わせて特定の出来事を想起し意味を与える行為として理解されなければならない」[浜 2007:8-9] と定義する。さらにアルヴァックスも、場所が大きな変化を直面する場合について、「そうした出来事を契機にして集団が、ずっと以前から今日に至るまで（場所）の姿を最も強烈に自覚するからであり、また、集団を場所と結びつけている紐帯が、まさに打ち砕かれようとする瞬間に、集団に対して明確に現れるからなのである」[アルヴァックス 1989 [1950]:167] と指摘したように、忠元公園が消滅の危機に直面した状況に限って、地域の人々の「集合的記憶」が発動され、それが忠元公園という「場所」に共通的な価値と意義を与え、そして、それこそが地域の人たちの復活や維持活動への自発的な取り組みの「原動力」だと言える。

アルヴァックスの集合的記憶論では、「場所」を「集団」と関連付けて議論したが、「忠元桜の会」の場合、会ができた以前、その会員たちを一つの集団として捉えることは難しい。では、彼らのそれぞれの「個人の記憶」・「集落の記憶」・「地域の記憶」が「集合的記憶」になった「共通基盤」はなんだろうか。私の考えでは、それは花見である。以下で、花見はどういうふうに「共通基盤」になるのかについて述べたい。

地元の人々は、毎年、あるいは数年かおきに必ず忠元公園で花見をする。花見が毎年繰り返し行われるという特性によって、彼らの記憶は一過性のものではなく、蓄積され、想起しやす

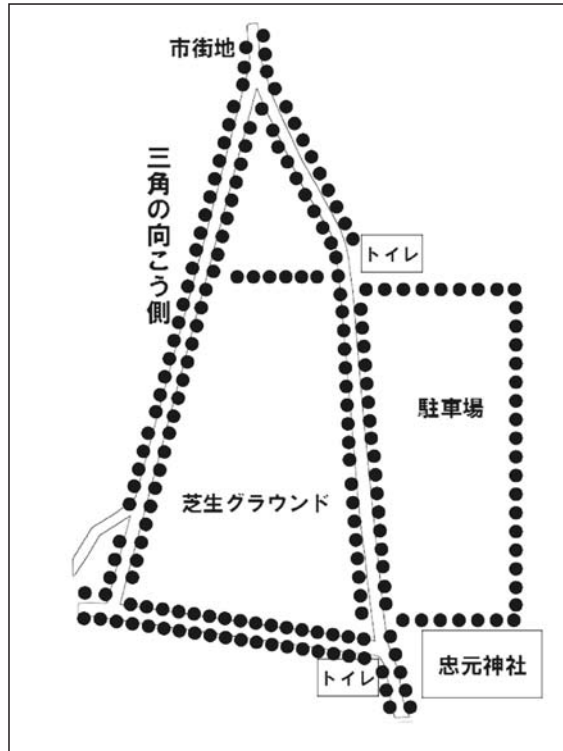


図3：忠元公園の地図（著者作成）
注：黒い丸は桜並木の位置を表す。

くなっている。そして、たとえ今まで一緒に花見をしたことがなくても、彼らはそれぞれ同じ場所で毎年花見を行ってきた故、その年、その時代の個人、集落、あるいは地域内での出来事や歴史など、花見について語り合う場合に共有できる記憶や歴史がある。私はこれを「歴史的時間の共有」と呼びたい。

また、人はそれぞれの小集団で花見をするが、しかし、花見とは、それぞれの小集団で楽しむというより、数多くの小集団によってできた花見の場という大きな空間と群集の中で楽しむということである。つまり、花見は空間上でその中にいる個人や小集団に「楽しさ」、「幸せ」を共有させるという特性がある [白幡 2000:229-230]。そして、人々が同じ場所で花見をする時に共有できるものは、その「楽しさ」や「幸せ」である。私はこれを「娯楽的空間の共有」と呼びたい。

花見はその特性により、時間軸でも空間軸でも、人々に「歴史的時間」や「娯楽的空間」の記憶を共有できる「共通基盤」を提供し、それは、また、個々人の持っている「個人の記憶」・「集落の記憶」・「地域の記憶」をも「集合的記憶」にする「共通基盤」となりうるのだと言えよう。

つまり、花見は場所として一つの「共通基盤」となり、地域の人々に個々人の「個人的記憶」・「集落の記憶」・「地域の記憶」が共有できる場を提供し、さらにこの場が一つの「娯楽空間」であるという共通認識を与えることによって、地域の人々の間で「集合的記憶」を形成させた。今度、地域の人々はこの「集合的記憶」を通して、花見の場所から共通的な価値と意義を見出し、さらに、自発的に共通の行動に動き出すことによって、花見の場所が復活され、維持されていく。

おわりに

本稿は伊佐市という地域において、忠元公園という花見の名所を対象に、花見の定着と変遷のプロセス、特にその中にある忠元桜の2回目の復活について詳しく記述し、それを成し遂げた「忠元桜の会」について考察を試みた。そこで、地域社会の人々と花見との関係を解明するために、「忠元桜の会」の会員5名を対象にインタビューを行ない、彼らが「忠元桜の会」に参加したきっかけや、行った活動、そして忠元公園での思い出や経験についての彼らの語りを記述した。それぞれの語りは一見して異なった内容であったが、その中に共通しているのは、地元の人でしか語れない経験や記憶が数多く含まれていることである。つまり、忠元公園は特別な場所として地域の人々の集合的記憶のなかに刻印されていること、そして、このような場所が存続の危機に直面する場合、刻印された「集合的記憶」が想起され、地域の人々に共通の価値や意義を自覚させ、さらに場所の復活や維持という共通の行動の「原動力」にもなってきたのだと言える。

最後に、個々人それぞれに属する「個人の記憶」や「集落の記憶」、「地域の記憶」がいかにして「集合的記憶」になったのかについて、「集合的記憶」の共通基盤が「花見」であることを確認し、花見はその特性により、時間軸でも空間軸でも人々に「個人的記憶」・「集落の記憶」・「地域の記憶」を共有できる基盤を提供しているものと考えた。

以上の議論から、花見は日本全国の一般的な行事でありながら、一方で、地域によっては、花見は地域社会と深く関係し、地域社会とともに歩んでいることがわかる。今後さらに、地域に根ざした花見の実証的研究が積み重ねられることにより、日本の花見文化の全貌、そして、日本にとって花見あるいは桜がいかなる意味を有しているのかというより大きな問題の解明につながると思われる。

謝辞：本稿の執筆に当たっては伊佐市の忠元公園の関係者、とりわけ忠元桜の会の会員の東哲郎氏、今村隆氏、平城ミエ氏、平山政男氏、神園祐治氏には、インタビューによる情報提供や様々な貴重な資料の提供をいただいた。ここに記して深く感謝申し上げたい。

参考文献

有岡利幸

2007 『桜』 『桜』 「ものと人間の文化史 137-1」 法政大学出版局。

有川国千賀

1973 『菱刈史・北伊佐史』 名著出版。

アルヴァックス, M.

1989 (1950) 『集合的記憶』 (小関藤一郎訳) 行路社。

伊佐市郷土史誌編さん委員会

2010 『新納武蔵守忠元公小伝』 伊佐市。

大口教育委員会

1988 『大口市三十年誌』 大口市。

大口市郷土誌編さん委員会

1981 『大口市郷土誌 上巻』 鹿児島県大口市。

1978 『大口市郷土誌 下巻』 鹿児島県大口市。

2008 『大口市制五十五年誌』 鹿児島県大口市。

大貫恵美子

2003 『ねじ曲げられた桜 美意識と軍国主義』 岩波書店。

佐藤俊樹

2005 『桜が創った「日本」 ソメイヨシノ 起源への旅』 岩波書店。

白幡洋三郎

2000 『花見と桜 日本のなるもの 再考』 PHP 新書。

陳珏勲

2005 「「花見」の人類学的研究 宮城県仙台市におけるフィールドワークに基づいて」
『東北人類学論壇』 (4), 東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室, pp.21-30。

浜日出夫

2007 「記憶の社会学・序説」 『哲学』 117, 三田哲学会, pp.1-11。

山田孝雄

1941 『櫻史』 櫻書房。

熊華磊

2012「地域と花見に関する文化人類学的考察」(鹿児島大学人文社会科学研究科修士論文)。

参考資料

資料1 平成22年度版『統計いさ』。

資料2 伊佐市概要. <http://www.city.isa.kagoshima.jp/about/gaiyou.html>,
(アクセス:2012年12月6日)。